流行唄

兼常清佐

青空文庫

1

「流行唄というのは一体どういうものでしょう。」――ギンザ或春の夜、剽軽な雑誌記者が私にそんなことを聞いた。

難問である。一口にそれに答える事はむずかしい。それに答えるにはギンザを四丁目からシンバシまでくらい歩かなければならない。ただ流行唄はどんなものでないかという事なら、私には五歩行く間に明瞭に答えられる。――流行唄はラジオの国民歌謡のようなものではない。

流行唄には気分と感情がある。やさしさがある。なつかしさがある。暖さがある。捉われないものがある。強いられないものがある。二十四時間の周期で必ず私共の耳にはいって来る規律的な、計画的な音楽などは、どうも流行唄という事からは縁が遠い。また私も国民歌謡が非常に流行しているという話を聞いた事がない。

シュトルムは『湖畔』の中にこう書いている。――「流行唄は作られるものではない。空から降って来て、陽炎（かげろう）のように地上を飛びまわる。彼処でも此処でも至る処で人々に唄われる。我々の事業も煩悶も流行唄の中に唄われている。結局我々が総がかりで流行唄を作り上げるようなものである。」

流行唄というのは正にこのようなものである。国民歌謡のようなものではない。

シュトルムが『湖畔』を書いてから百年の年月がたっている。今では流行唄もよほどその形を変えて来た。それはニッポンでも同じ事である。まず変ったところは作曲者や詩人がその存在を主張して来たことである。昔の流行唄も、もちろん誰か作った人があるに相違ない。『追分ぶし』も『キソぶし』も『リキューぶし』も作る人がなくては出来るわけはない。しかしその当時の社会では、それを作るという事が、その作った人の存在を主張するほどに値しなかったであろう。作った人も強いてその存在を主張しなかったであろう。それで今から見れば、そのような唄はいつともなく、誰の手からともなく、出来たもののように見える。ある地方の人々の間から全く自然に出来上ったもののように見える。ちょうど野に自然の花が咲き、森に自然の鳥が鳴くようなものに見える。

今では流行唄を作るという事は、相当な仕事になる。経済的な価値を持っている。またその上に作曲者はそれで社会の名声を博することも出来る。流行唄を作った人は、作ったという事を自分の名で主張しなければ損である。それで今の私共には流行唄と同時に、それを作った人のことも関心の的になる。実際大正から昭和にかけて私共は沢山の美しい、おもしろい流行唄を得た。そしてそれと同時に、それを作った人、例えばナカヤマ・シンペエという名は私共には古典的な名になった。

このような事では、近頃の流行唄はよほど芸術的な音楽に似て来た。私共はナカヤマ・シンペエの流行唄というおなじような意味で、シューベルトの「リード」とかショパンの「エテュド」とかいうように言う。それはその人でなくては出来ないものの事である。つまりその作品とその個性が離れられないように結びつけられている事である。

そこで人々はいつもこのような事を考える。――この傾向がだんだん発達するならば、流行唄も芸術的にだんだん進歩して、結局将来のナカヤマ・シンペエはシューベルトになり、『枯れすすき』や『東京行進曲』は『冬の旅』になるであろうか。

もしそうなれば、今の流行唄を目のかたきにしている老教育家先生だちにとっては誠に万歳である。しかしこの事には多少の矛盾がある。それはちょうど人間は猿から進化したという学説があるから、動物園の猿は、もう少し待ったらみな人間になって、『論語』や『孟子』を愛読するだろう、という事に似ている。しかし動物園の猿がまだ人間になったためしがない。人間は人間で、猿はいつまでも猿である。流行唄はいつまでも流行唄であり、芸術的なリードはリードである。それぞれ違った意味の存在である。

私は今せっかく出来上った国民歌謡にけちをつける気は毛頭ない。けちを付けて見ても私の得にならない。そしてあれが大いに国民の音楽教育の助けになるという事は私は信じて疑わない。そして将来あるいはその中から美しいリードが出ないとも限らない。しかしこの流行唄でない国民歌謡で流行唄をやっつけようという事には多少計画に矛盾がある。それは話がまた別である。私は国民歌謡にけちを付ける気が毛頭ないように、レコード屋さんの提灯を持つ気も毛頭、毛頭、毛頭ないが、もし私がレコード屋さんの取締役であったら、国民歌謡のようなものがいくら出来ようが、全く平気である。それはそば屋の隣に教会が出来たようなものである。物が違っているから、少しも商売の邪魔にはならない。

流行唄というものは人間の感情の一大要求である。冷い修身の文句や、むずかしい文学の歌に間に合せなふしを付けたようなものくらいで、簡単にあっさり追払われるような、そんな根底の浅いものでない。

ニッポンの流行唄はニッポン語で唄われる。――そういったら読者諸君はそんな事はわかり切っていると怒るかもしれないが、しかし必ずしもそれはわかり切っているとばかりは言われない。そしてこの辺で話が多少面倒になって、注文の随筆という事からは、あるいは流行唄と国民歌謡ぐらいのへだたりが出来るかもしれない。

2

ニッポンの流行唄はニッポン語で唄われる。ニッポン語の性質からひどく離れたものは私共になつかしみを感じさせにくい。例えば世界的に有名な流行唄『暗い日曜日』は私が確に一番美しい、一番おもしろいと思った曲の一つである。私はあの曲に気品をさえ感じる。しかしそれをニッポン語で唄うと何となくおかしい。不自然である。フランス語で聞く美しさの半分以上はなくなる。やはりニッポンの流行唄はニッポンの言葉にあったニッポンのふしでなくては本当には成立しない。この事が学校唱歌だの国民歌謡だのいうような西洋音楽の組織を基礎にした曲が、心底から私共大衆の感情になずまない理由の一つであろうと思う。

ここで話が実際非常に面倒になる。一体何がニッポンのふしであるか？　一体ニッポンのふしというような特別なものが存在するか？――それが話の中心になる。

私はまず第一に声の質の事を考える。それに何かニッポン風なものがありはしないだろうか。そしてそれが私共にニッポン風な流行

唄に、特に親しみを感じさせるのではあるまいか。殊に女の声はそうではないだろうか。今まで正式に西洋風な発声法を練習した女の唄で一世を風靡したというような例は割合に少い。それよりも芸者の唄の方が段違いに一般から喜ばれた。私もあのような声は一種の綺麗さをもっていると思う。表情には乏しいし、力が無いし、音域が狭いが、しかし綺麗で、そして何よりもいい事は唄の文句がよくわかる。発音が十分にニッポン語に適している。あれを正式のアルトやゾプラン風にやったとしたら、文句の意味はあれほど明瞭にわかるまい。国民歌謡を本当に流行させる必要があるならば、今をはやりの『ああそれなのに』を唄った芸者に唄ってもらうのは確に一つの方法である。

私はこのような発音や唄い方の相違が、実際音波の上にどんな形になってあらわれているかを顕微鏡で見ようとした。しかし今私はここでその数字やグラフを振廻そうというのではない。またこのような事は現象が非常に複雑で、一朝一夕には真相はわからない。ただ私が今までおぼろげに知った事の一つはこうである。――西洋の発声法は咽喉を一種の楽器にする事である。性質がよほど楽器の音に似ている。ニッポンの唄は結局ニッポン語の朗読や談話の一種である。普通の話の声に近い。

流行唄の文句は都会の若い生活の裏面をよく面白く歌っている。文句がなかなか巧みである。「怒るのがあたりまえでしょう」だとか「×××素肌のはずかしさ」だとか、とにかく何となく人の気持に訴えるように、うまく出来ている。正に小唄に唄うのに適している。文句がよくわかることは絶対に必要である。ニッポンの流行唄が何も知らない芸者たちにニッポン語らしく唄われることには、十分意味があると私は思う。

しかしまだ一つ難題が残っている。――ではニッポン風のふしというものがあるか？　もちろん、ただふしだけを取るならば、ニッポン風のふしというものがあるにきまっている。長唄のふし、清元のふし、謡曲のふし、ニッポン各地の民謡のふしというようなものである。そのようなものは西洋のどこにもないから、いうまでもなくニッポン特有のものである。今私共の問題は、それが何かの必然性を持つかどうかという事である。つまりそのようなふしの根底は、ニッポン語そのものの性質の中にあって、ニッポンのふしとニッポン語とは、必然的に離れられない関係にあるかどうか、というのである。

これは私の口癖でなく、実際難問である。それを考えるためには、まだまだ沢山の実験と沢山の観察とがいる。

私はこれまでニッポンの言葉やニッポン語の文句を読んだ場合や、あるいは唄った場合をフィルムに記録した。そしてそれを高さだけについて測定して、いろいろのグラフをかいてみた。そしてニッポン語とニッポンの唄と何か離れられない関係があるかどうかを考えようとした。もちろんこのような実験は、そう急にはまとまらない。今私はそれについて何も断案を下すことは出来ない。ただこれまでに私はおぼろげに知った事は、前にニッポン風な唄の声の質について述べた事と非常によく一致している。それは次のような事である。――ニッポンのふしはニッポンの唄の文句を読んだ場合と性質がよく似ている。ニッポンのふしはニッポンの唄の文句の朗読の一種である。しかし西洋音楽による唄では、文句を読む時の語調 Sprach-melodie は相当無視される。そしてふしはほとんど楽器と同じよう

な約束で動く。この系統は別々な音楽の系統である。

この事は私共の常識ともよく一致する。今までに大喝采を博した唄い手には多くの芸者があった。それには物珍しさも手伝ったであろうが、唄い方にも何か大いに人の心に訴える処があったであろう。しかし彼らは音階の練習どころでなく、「ド」と「レ」とどちらが高いか低いかどころでなく、初めからド・レ・ミという言葉さえも聞いた事はあるまい。本格的な音楽には全然素人であった。それであれほどの大成功をかち得ている。また作曲者にしても、和声学教科書の例題をピアノで弾かせたら、どれほど正確に弾ける自信があるか怪しいものだそうである。しかし彼らはそれで一世を動かす名流行唄を作っている。これを見ても本格的な音楽的訓練と流行唄とは相当物が違っている事がわかる。

また私共が流行唄のレコードをかけて発売の楽譜を見ながら、その芸者の唄った声の通りをピアノで弾くとする。ピアノはレコードのふしと似るには似るが、しかし完全には一致しない。ただ似るというだけの事である。声そのものの高さにも、ふしの唄い方にも西洋の楽器では出来ない処がある。楽譜もそこまでは書く事が出来ない。レコードの中に唄のふしを楽器でやる一節のあるものなら、その楽器の部分と声の部分とを比べて見てもすぐわかる。西洋の音楽や楽器の系統とニッポン人の唄のふしとは、物理的な約束の違う処がある。似てはいるが、一致しない。そこへ西洋音楽の長短の音階の構造などを不用意に持出して来ても、それは少々お門が違う。ニッポン人の唄はニッポン語の語調を基礎として、もう一度よくその性質を考えて見なくてはならないものである。私共一般の流行唄を好む大衆は、このニッポン風なものの方に親しみを感じている。

それはニッポン語の唄として誠に当然な事である。そして西洋の系統の音楽を聞く時には、その時にはまた、そのような気持で聞く。それが本格的な、大仕掛なものになれば、『冬の旅』の演奏になり、ちょっとした模倣という事になれば、学校唱歌だの国民歌謡だのいうようなものになる。その時には私共はニッポン語が明かに西洋音楽の約束に従って鋳直されたものであるという感じを受ける。

私にはこの鋳直されたという感じは決して不愉快ではない。不愉快などころか積極的に面白いと思う。ニッポン人のゾプランやテノールの声は私はすきである。もし私に唄が唄えたら、私はもちろん本格的なテノールで『冬の旅』を唄う。しかし私はニッポン人だからニッポン風にも唄って見る。それは持って生れたもので、声の綺麗なニッポン人なら誰でも唄える。西洋のド・レ・ミのむずかしい練習も何もいらない。私は『追分ぶし』も唄うだろうし、『東京ラプソディ』も唄おう。それも音楽である。そして唄いたいから唄うのに、一体誰に遠慮がいるだろう。

月々レコード屋さんは洪水のように流行唄を作り出す。そのうちの極めて少数なものが選ばれて私共大衆の気に入って流行する。非常な厳選である。そしてレコード屋さんの必死の宣伝も今ではどれだけ大衆の選択力を支配することが出来るか、多少疑問だそうである。そのくらい流行唄は私共の生活の中に根を張っている。そしてそれはニッポン人の持って生れた咽喉で、持って生れたままの唄い方で唄われる。これに西洋音楽の系統の学校唱歌や国民歌謡ぐらいで対抗しようというのが、そもそも話が無理である。

私は流行唄というものが、どれだけ社会に害毒を流しているか、その程度を知らない。もし実際に害毒を流しているものなら、ナカ

ヤマ・シンペエの名曲『枯すすき』以来すでに二十年近い時間がたっているから、何か的確な証拠を私共は見せられていいと思うが、私は今までこれぞというほどの証拠を見せられた事がない。流行唄の毒害という事は、あるいは音楽を知らない老教育家先生だちのちょっとした幻想ではないかとも私は思っている。老教育家先生だちの本当の頭痛の種になっていい害毒は、まだまだ他に沢山ある。

私は大衆の一人である。流行唄は非常にすきである。あれが世の中からなくなったら、世の中はどんなにか淋しいだろう。そして今ニッポンは二つの音楽の系統を持っている。ニッポンのと西洋のとである。私はこの二つは同じように私共の生活の中に栄えて行っていいと思う。そのニッポンの系統を流行唄は確に代表している。私は学校唱歌や国民歌謡も育て上げて物にしたいと思うように、流行唄ももっと盛大にしたいと思う。少し度胸をひろくして見れば、どちらも同じく御代万歳を寿ぐ声である。

青空文庫情報

底本：「音楽と生活　兼常清佐随筆集」岩波文庫、岩波書店
　　1992（平成4）年9月16日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：小林繁雄
2007年12月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

流行唄

兼常清佐

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/